山口大学人文学部・韓国昌原大学校人文大学 学術交流講演会

韓国における人文学の現状と課題

洪　性君（昌原大学校 人文大学学部長）
李　潤相（昌原大学校 慶南学研究所長）

講演１
「韓国においての人文学の危機とその対応」

洪　性君（ホン・ソングン）
昌原大学校 人文大学学部長

はじめに

それでは、準備した課題について、皆様とともに時間を過ごしたいと思います。私が準備してまいりましたものは「韓国の人文学の危機とその対応」についてです。本論に入る前に、簡単に補助説明をさせていただきます。この人文学の危機と申しますのは、韓国に限られたものではないと思います。これは全世界的な現象だと言えると思います。私はドイツ文学を専攻しています。私は専門でありますのでドイツのいろいろな事情を見つめておりますけれども、90年代末にはドイツ文学を学んで博士課程を修了した方が、就職ができずに郵便配達員になるというような現象まで起こっています。

最近、私どもと姉妹学校になっておりますドイツの大学を訪問したときに、教授の席一つに100名以上の希望者が集まるということを聞きました。そして個人的なことですが、交換教授でおいでになっていた方が最高のクラスの優秀な教授の職に応募したんですけれども――今言ったようなことです――以前、ドイツでは、その成績でしたら就職するのに何の問題もございませんでした。ですけれども、今は博物館の臨時職員を何年かしていて、最後には職を失うようなことになりました。もう一つ、私の学校の同僚の教授ですけれども、アメリカで勉強した方たち、経済学や工学系統を勉強された方たちは人文学の教授よりもはるかに高い報酬を得られます。そういうふうな傾向にありますので、知らない間に人文学を見下げるような、そういう傾向が生まれているということです。

よくは存じませんが、これは世界的な傾向ではないかなと思います。こういうふうな一般的な事例が基本にあるということを念頭に置いて、これからの話をさせていただこうと思います。今お話しいたしましたものをベースにいたしまして、特に韓国的な特徴は何なのかについてお話をさせていただこうと思います。

韓国の大学環境

韓国の特殊な現象ですが、80年代から90年代初頭までの大学進学に対する過熱ぶりを解消するための基本的な政策方向が、大学の増設と定員の増加にありました。それで既に大

学はたくさん増えていますけれども、これからはその大学の定員を埋めるための高等学校の卒業生の数が減少しているということがあります。2016年になると大学の定員を下回り始める予測がされています。2016年からは高校を卒業する卒業生よりは、はるかに大学の定員が多くなります。

こういうふうな状況にありましては必然的に大学の数を減らさなければならない、そういうふうなリストラが始まるのではないかと思います。もう既にそういう傾向は始まっております。今現在は私立大学が中心となってそれを進めています。私立大学が中心と申しますのは、登録料を受け取りまして利益を得て、これで数字が合わないと経営が成り立たないからであります。それに比べて、国立大学は国から財政管理を受けていますので、今現在は、まだそういうふうな現象は起こっていません。ですけれども、2016年以降はそういうふうな現象が進みますので、国立大学もその影響から逃れることはできないと思います。そのときは定員を減らさざるを得なくなるでしょう。そのときに迎えるであろう困難を予防するという意味で、これまで大学では学科を統廃合する動きがありました。ですけれども、それは根本的な処方にはなりませんでした。ですので、また再度、学科募集制に戻ったような現状にあります。

韓国の人文学の状況

それでは、人文学の今の状況はどうなっているのか、そのことを見たいと思います。韓国の大学は全般的に定員が多いというふうに申し上げたんですけれども、人文学部は特にその状況がひどいです。大学を増員するときに、最も増員が容易なところが人文学部であったからです。これは一言で申し上げますと大きな予算が必要ないからです。この現象にだけ、急いでそういう対処をしてきたのではないかと考えます。長期間の需要の調査のなされないままに処してきたのではないかというように思います。大学進学率に合わせるために、その現象にだけ合わせるような傾向があったのではないかと思います。それで全般的に人文学の増員がなされた傾向にあります。これは本来の機能ではなかったということにあわせて、過多増員、多過ぎる増員に伴う就職率の低下を招きました。

ここで統計基準を見ますと、2006年度の統計ですが、自分の専攻に合った就職率が人文大学の卒業生は40. 1%、医科大学が82. 9%、工科大学が59. 8%、就業者全体の48. 8%にすぎませんでした。ほかの大学と合わせますと68. 9%になります。

こういうふうに就職率が低下している、そういう問題を申し上げましたけれども、これにあわせて韓国の人文学が直面している困難についてお話し申し上げます。増員をなされている現象に重ねて、今社会全体の雰囲気が、この人文学に不利に働いている様相があります。その中で学生たちの多くが国家試験を目指しています。就職に大変有利な工業系の大学までも敬遠される傾向にあります。それに比べて人文学分野は、なおさら回避され

るようなところがあります。そういうふうな現象がありますので、新入生の補充や優秀学生の誘致が大変困難であります。また大学に入りましても、ずっと人文学をやろうという学生たちが続かないのが問題です。それで、人文学部が廃止になったりなくなったりするような傾向にあります。これは1990年代の末ごろから深刻化してきました。

2006年度になりますと人文大学の教授たちが危機を感じまして、人文学の宣言をするようになります。一言で申し上げますと人文学の危機意識の宣言だと言えると思います。これを一番最初にやりましたのは、2006年の９月15日に高麗大学の人文大学教授らがやりました「人文学宣言」になります。また、それに続きまして、全国80余りの人文大学の学長らが「人文学危機宣言」をいたしました。

その２つの宣言の要旨を申し上げると、このようになります。まずは、人文学が今直面している危機の診断であります。これは社会現象の中で、余りにも市場論理を追求するために大学を商業化させてしまったということです。それに伴って人文学が枯死の危機に直面したということです。このように問題が展開したことに対する、みずからの反省点になると思います。その一つとして、社会的な要求と需要に見合うような対応をしてこなかったということです。そして社会の変化に伴う新しい学校の研究方法論の開発や、社会的コミュニケーションについて対処できていなかったということです。それについて、このような現象を自己反省のもとに、ここに限定するものではなくて、これを解決するためには国の力も必要だということです。この人文学についても関心を持ってもらって、政府に対して支援拡大を要請したということです。

人文学の変化

このような現象があった後に、人文学の学科の中ではみずから変化しようと模索する動きがありました。このように社会の現象に対応しきれなかった部分に対して、それを解決するために新しい専攻を開発して、制度的にはいろいろな分野を一度に多様に勉強できる、そういうふうな教養課程などを確立しました。そのような中で代表的なのが、いろんな学問を一つにまとめた文化コンテンツ学科のようなものです。また、人文学はすべての学問の基礎的な教育であるという、人文学の基礎学問としての確立です。その中で、私が例に挙げましたのは読書と文章を書く作業がありますけれども、これは東洋、西洋の古書を読ませることです。文章を書くことにつきましては、学問的なことも含めて自分の考えを上手にまとめるようにする、そういうふうな技術です。このように基礎的な教養を磨くことは大学の中の一つの制度といたしまして、いろいろな学部とは別に、教養・基礎教育院の制度にいたしました。また学問を専攻する人たちが継続して勉強するための、博士以前、博士以降の勉強プログラムをたくさん開発いたしました。

このように大学の中で変化のための模索が

あり、また自己反省の中でもありましたように社会とのコミュニケーション不足を補うために、大学の外でのさまざまな人文学の活動をすることになりました。定職を持たないような人たちが、自由文筆家として活動しながら文学を勉強するようなそういうふうな活動があります。幾つかの例を挙げることができます。

ですが、大変これは惜しいことですが、そんなに多くの人が参加するようには、まだなっていません。大学の外で人文学者として生きるということは大変困難を伴うことです。それに比べて一般社会との疎通は、これは大変な進歩を遂げております。これの契機となりましたのは宣言のところでも申し上げましたけれども、人文学がこのように滞った原因は象牙塔の中に閉ざされていたというような点を挙げることができますが、社会とコミュニケーションができるようなさまざまなプログラムを開発いたしました。これは、最初は大学の中で企画されまして外に出ていくようなそういうふうな講座でございましたけれども、今は外からの要求によって、中でそれが開発されるような事例もございます。このような事例の一つを見てみたいと思います。

いくつかの事例

一つの事例ですけれども、これはホームレスのための韓国型クレメントコースです。これは道で浮浪している方たちというふうに見ていただいたらいいと思います。だれも見つめることのない社会的な落伍者と言える人たちです。これまでの社会的な統廃合の試みは、どこかにいって少しでもお金を得るための手段を与えることばかりに目が行っておりました。ですけども今は、彼らに似合わないような感じの人文学を提供しようという試みでございます。これは、韓国では自発的にこのような動きが始められました。そういうふうな過程の中で、アメリカの言論人で社会批評家のアール・ショリスが紹介されました。この本が紹介されまして、本を通じまして、もっと体系化されましたし、確実で理論的な後押しがなされました。これで確固たる結果を見出すことができました。最もすぐれた成果を上げました。その成果といたしまして、ソウルの聖公会大学でやっております「希望の人文学課程」でございます。2008年度は313名のホームレスが修了いたしました。ことしは1,643名が志願いたしまして1,206名が修了いたしました。それでソウル市長が大変感動いたしまして、ホームページにこのことを大きく取り上げておられます。この人文学の革新と言えるものは道具的な知識を提供するのではなく、みずから考える力を再び回復させるということでした。それは、彼らがみずから立ち上がるのに最もふさわしい、そういうふうな支援であると言えるということです。

それらの一つの例を持ってまいりました。最近出版された本ですけれども、生活者として失敗した後にアルコール中毒、賭博、また家族の虐待、ついにはホームレスになった人の例です。人文学の講座を通じまして、みずから再起いたしまして、自分が再起できたその体験談を本にまとめました。本の題ですけども「道の男」ですね、「町なかの男、人文学に出会う」というこういうふうな本が出版されました。町なかで泊まるところもなく一日一日を困窮していた人が、こういうふうに人文学に出会うことによりまして一冊の本を出版できるところまで再起できたということです。

２番目の事例を申し上げます。学問間のコミュニケーションの一環といたしまして理工系、また産業界の人たちを対象にした人文学の講座です。それの代表的な事例といたしまして韓国科学技術院ＫＡＩＳＴの講座、これは理工系リーダーのための人文学講座です。日本でも同じだと思いますけども、技術系の大学に進む方たちは卓越した知識を持っておられると思います。ですけれども、私どもはこういうふうな方たちと会ってみますと、意外にも、この方たちは余りにも知性的に偏り過ぎているような印象を受けることがあります。このような方たちが社会の指導者的な立場に立たれるようになると、人文学的な教養なしにはなしはいられないと思います。こういうふうなことを解決するために理工系業界の自発的な要求と人文学界のコミュニケーションの要求、互いにその思いが出会うことによってなし得た講座でございます。

３つ目の事例ですけれども、これは社会各界指導者のための人文学最高指導者の課程です。これが始まった契機になりましたのが、ソウル大学で2007年に開設されましたＡＦＰです。最初に始まるときは企業の最高教養者、高位公職者、高級将校、弁護士、医師などが大挙志願して大きな社会的関心を集めました。大変これは成功裏に定着いたしました。これが定着した後に、いろいろな大学で似たような課程が開設され、好評進行中であります。昌原大学校でも、今このコースを導入して進めております。これは後ほど李先生から、また詳しく事例を発表していただきます。最初はこのようにして始まったものですけれども、今は社会的に大きく普及いたしまして、企業も自主的に企画いたしまして、大学などにいろいろ要求が来ております。２つの事例を申し上げますと、まずソウルのロッテ百貨店がありますけれども、これはソウル大学の人文大学に依頼して、社内の人文学講座を実施しています。それから２番目ですけれども、韓国で一番大きな浦項製鉄という会社がありますが、これは社員教育といたしまして、外部の人文学の講師を招聘いたしまして人文学講座が開設されております。

５番目の事例になります。社会的に独立または隔離された集団に、この人文学を持ち込みましてコミュニケーションする、そういうふうな学問でございます。その最初の例ですけれども、職務的に社会と隔離されております軍部隊についてです。これは昌原大学校と忠南大学の事例を見ることができます。この部分については、次の李潤相教授から詳しく申し上げたいと思います。２つ目は、強制的に隔離されております刑務所です。これまでの刑務所の中の教育といたしましては宗教的な教育に限られておりました。ここに新しい代案といたしまして人文学の講座が実施されたわけです。ここに昌原大学校と慶熙大学の例を見ることができます。

政府、地方自治体の支援

これまでの事例は社会的なコミュニケーションのための努力ですが、人文学の宣言におきましてもう一つの要求でありました、政府の支援についてお話します。この人文学の宣言で提起されました人文学者たちの要求について、政府が真摯にそれを受けとめまして、研究者たちを支援する支援制度を通じまして具体的な支援策をいろいろとつくりました。制度的な枠を申しますと、2009年、ことしの６月以前には韓国学術振興財団がこれを担っておりました。ことしの６月以降は韓国研究財団がこれを担っております。参考まで

に申し上げますと、この韓国研究財団は韓国科学財団、韓国学術振興財団、科学技術協力財団を一つに統合して出発した単一総合研究支援財団になります。

それの代表的な支援策の一つが韓国人文事業です。具体的な内容を見ますと2007年から10年の間、毎年200億ずつ、総額4,000億ウォンを支援する策です。日本の額に比べますと、そんなに大きな額とは言えないかもしれません。ですけれども韓国の経済の額数から照らし合わせますと、これは相当に大きな額と言えると思います。この支援の対象は個人ではなく大学付設研究所であります。この研究所では、個人の次元ではできないような大きな共通の研究について支援をいたします。人文学の分野で３分の２、海外の関連支援が３分の１です。特記事項は、この研究所の研究員は、この事業が所属している研究所に、この研究期間が終わりましたら専任の教授として雇用されるということです。学問を継続する人たちを支援するという、そういうふうな意味が込められています。

支援策の２を見たいと思います。これまで例を挙げておりました社会的コミュニケーションのための政策について支援をするためのものです。今、幾つかの事例を申し上げました、その社会的な事業を支援するためのものです。これも個人的な支援ではなく、団体に対しての支援になります。2007年には26団体、2008年には22団体がその支援を受けました。

そのほかに小規模の事業展開としまして、２つを掲げることができます。社会的に人文学の興味を引き起こすために１週間を「人文週間」と決めまして、全国の大学、研究所、研究ミーティングなどが、この機関や市民と連携いたしましていろいろな行事を遂行いたします。例えば学術発表会、講演、朗読会、このようなものを支援いたします。こういうふうな講演などの事業支援いたします。

またもう一つは、硯学とともにする人文学です。これは研究者自体がやります。これは韓国内の最高レベルの硯学を集めまして、一般の市民を対象として行う特講になります。大変惜しいことですけれども、これはソウルに限られております。ですけども、この講義を受けた一般の受講者たちは大変熱い感想を漏らしております。その水準も大変高いです。最高の人文学者が、自分が一生かけて勉強した専門分野を総合いたしまして、２時間の講座を三、四回、こういうようなものを集約的に提供する講座です。同じ人文学を目指している専門家たちも、これを聞いたら大変ためになるようなそういうふうなものです。これが全国に展開できれば本当にいいと思いますけれども、大変惜しいことに今はソウルだけでしかされておりません。

５番目の支援策は学問後続世代の継続養成のための支援でありまして、博士以前、博士以後の支援プログラムになります。全国の人文学者たちは韓国研究財団に、このプログラムをもっとふやしてほしいという要求をしています。ですので、これはまだ不足している分野だと言えると思います。

６番目は、もう一つの支援策でもありますし新しい試みでもあります。これまで人文学が滞るようになりました理由の一つといたしまして、余りにも学科の中に固守し、その中で安住していたというようなところがありますけれども、これを学者間で連携するようにしたプログラムです。この韓国研究財団の中に新しい分野をつくりました。この名称は「文化融複合団」です。参考までに、この韓国研究財団の人文社会研究本部の中には、こ

のような会があります。語文学団、歴史哲学団、法政商経団、社会科学団、これまではここまでしかなかったんですけれども、これに新しく文化融複合団が開設されました。

これまでは国家的な支援でありましたけれども、次は地方自治体の支援になります。それは先ほど申しましたホームレス対象の人文学講座でございます。ソウル市長がそのように感動いたしましたので、これは、これからもっと拡大されて、もっと体系化されていくものと思います。また、それに類似したようなものが京畿道というところで事業展開されております。また、地方の放送局と提携して進められる市民人文学講座も展開しています。

評価と展望

これまでは、新しく展開されております韓国の人文学の様子を皆様に御報告しました。このように今展開されておりますものをここで評価してみたいと思います。今まで、私は大きく３つのカテゴリーに分けまして人文学の変遷について申し上げました。人文大学自体の発展の方案について申し上げました。社会とのコミュニケーションのための努力、政府の支援、こういうふうな努力が今は成果を見せ始めまして、大学の中、また大学の外におきまして、人文学が目を見張るような勢いで活力を得ております。このような傾向は社会全体の人文学と文化産業に対する関心の高潮とあわせて、私ども人文学を目指す者全体が共有できる思いだと思いますが、このごろ産業界で言いますには情報社会を超えまして知識規範の社会、これが文化事業として確立されつつあると言われています。知識規範の社会と文化産業の時代は、人文学が創造力を提供する学問といたしまして社会的に大きな基盤となす、人文学がその位置を確固たるものにするというような認識が社会で高潮しております。韓国におきましても、社会的にこういうふうな思いは共有されております。このような認識が進みますと、人文学の活性化は大学内外におきまして大きなはずみを得ることができると思います。

このような評価にもかかわらず、まだ問題点が残っています。最初の問題といたしましては、人文学が持っております実用性の問題があります。人文学がどんなに頑張っても、産業界で直接必要な知識を与えることはできません。これはずっと言われてきた問題でありますし、韓国の特殊性から見ましても、高校卒業生に比べて大学の定員が多過ぎるということにつきましても根本的な問題はそのまま残っております。このような根本的な問題と照らし合わせてみますと、これまでの努力は部分的なソフトウエアの改善策にすぎません。また、政府の支援も以前と比べますと大幅にふえましたが、相変わらず不足した状態であると言えると思います。参考までに統計の数字を見ますと、人文学のみならず社会科学分野も含めて、国家が支援する予算の総額は国家全体のＲ＆Ｄ予算の2. 71％にすぎません。

最後になります。今申し上げました問題点が、このように改善していけばというようなことを挙げてみます。これをなし遂げるまでには大変多くの困難と試練が待っていると思います。このような長い困難の道を、あえて人文学がこういうふうな道に到達できればと思っております。１つ目は超過している定員の問題ですけれども、これは大学の特性化を進めまして、人文学をなし得る大学のみが人文学をやって、それをなし得ない大学は淘

汰されまして定員が合うことを期待しています。２番目ですけれども、教養教育の強化によりまして大学内での立場を向上させることを期待しています。すべての基礎学問としての地位を確固たるものにするということです。また、産業的な規範性も固められるように期待しています。基礎基盤のところを飛び越えまして、文化産業としての基盤を確保することによって優秀な卒業生の就業率を向上させることを考えています。それから、人文学を勉強したい人は、大学の外でも職業人として活動ができることを考えています。

講演２
「人文学の活性化のための一つの試み －開かれた人文学講座を中心に－」

李　潤相（イ・ユンサン）
昌原大学校 慶南学研究所長

前のところで、洪性君教授が韓国の人文学の危機とその対応については詳しく皆様に申し上げました。私からは、私どもの昌原大学におきまして人文学の活性化のために試しております幾つかの試みについて申し上げたいと思っております。

人文学の危機と克服方案

まず、人文学の危機と克服の方案について、簡単に申し上げてみたいと思います。韓国で人文学の危機と申しますのは、よく話が出ますのは、人文学科の学生の募集率、人文科の卒業生の就職率、それから人文学部の廃止、また人文学に対する支援の縮小、こういうことがよく上げられます。

けれども、このような現象は、これが果たして人文学の危機なのか、つまり学問としての人文学の危機なのか、でなければ人文学者の危機なのか、つまり学者といたしまして、職業人といたしましての危機なのか、いろいろな論議があります。私が思いますには、韓国の人文学が発展するためには、今までの韓国の人文学が大衆と時代の変化に伴ってみずからを変化させ、時代の変化に合わせようとする、そういうふうな努力をしてきたのかということ、そういうふうな点について、みずから問い直さなければならないと思います。

このように、人文学がみずからの徹底的な自己反省なしに、この責任をすべて外に見出そうとするならば、そうなるとそれは人文学の危機ではなく、人文学の貧困と言えると思います。ですから、人文学が発展していくためには、人文学がより広く開放され、また文化、学術を超えて学問が統合されるような、自己革新が必要だと思います。

これまで韓国の人文学の危機開放のために、改善のために展開されていましたのは、１つは政府の支援と政策の転換です。研究費用を支援するとか、学部制を廃止するとか、また教養学問を強化するとか、そういうものが要求されてきました。

また、人文学のもう一つの要求は、社会的な実践であります。私の専攻であります歴史学の分野から申し上げますと、カン・ミョングァン先生が現代韓国を分断の時代というように規定し、歴史学者たちが分断の時代の克服と民族の統一を訴えています。その克服の対案は、もう一つ、人間の存在と、また文明全体に対する議案であります。人文学の危機と言われるものは、人間存在の危機に基づいている。よって、人生の真実の価値を見出すことに邁進しなければならない、という主張であります。また、文化研究、または人文学

的な文章を書くことによりまして、人文学を克服することが訴えられています。新しい研究、また教育方法の開発、また大衆文化論を拡大すること、また情報化時代に対応すること、このようなものが挙げられています。私どもの昌原大学の人文大学は、人文学の危機の克服の１つの方法といたしまして、人文学の大衆化による活性化を目標に置き、開かれた人文学講座と人文最高アカデミーを運営しています。

先ほども洪性君先生が申し上げましたけれども、開かれた人文学講座の責任者は廉宰尚先生でありましたし、人文最高アカデミーの責任者は前学長でありました廉宰尚先生と現学長であります洪性君先生でありました。私はその下で実務を担当いたしました。その内容を私が整理いたしまして、発表いたします。

ここで、開かれた人文学講座の「開かれた」というのは、狭い意味での人文学、普通、人文学といいますと、文学、歴史、哲学をいいますけれども、これにかかわらず、限定されず、社会科学とか芸術、また自然科学までも含めた広い意味での人文学、それでそういうふうな意味で開かれたという言葉を使いました。もう一つ、大学の中に限定されず、社会、それから大衆とともに行なうという、そういうふうな意味を込めまして、開かれたという用語を使用いたしました。

オープン人文学講座

それでは、開かれた人文学講座について申し上げます。

趣旨及び目的についてですが、今お話ししましたように、人文学の大衆化により、人文学を活性化する一方で、大学で上げました成果を社会に還元するために、さまざまな形態の開かれた人文学講座を推進することにあります。それは、平素、人文学に接しにくい軍人や、また刑務所に入所している人たち、このような疎外的な階層に重点的に接近するための講座を企画いたしました。また、一方では、大学と産業界、官公署、軍部隊など、地域にあるいろいろな団体との交流と協力により、地域社会の発展にも寄与できるようにすることに目標を置きました。

経過を申し上げますと、2007年10月に、陸軍39師団と人文学講座開設協約締結を進めました。11月から、39師団とともに行う開かれた人文学講座を開始いたしました。参考に申し上げますと、韓国の陸軍39師団は、慶尚南道の全体を駐屯地帯にする部隊です。それで、昌原に師団の本部がありますし、慶尚南道のいろんな地域に、この傘下に連隊や大隊が駐屯しています。それで、私どもの昌原大学と開かれた人文学講座を行なうためには、とても恵まれた条件を持っております。

このように人文学講座を始めてすぐ、2007年の末に、学術振興財団の市民人文学講座支援事業部があったんですけれども、ここに選定されまして、2008年から開かれた人文学講座を本格的に運営いたしました。2008年度には、53回、120時間の講座が開かれました。

2008年度末には、再度、支援事業に選定されまして、ことしの2009年、開かれた人文学講座を拡大運営いたしました。80回、136時間の講座が今進行中であります。

右側にあります絵は、陸軍39師団とともに行なう開かれた人文学講座のポスターの絵柄でございます。大学と軍部隊が協力する、その姿をよく見せていると思います。

ことし2009年には、昌原にある39師団の本部だけでなく、固城、晋州、昌寧にある連隊、鎮海にあります海軍士官学校、また海軍基地司令部、また昌原の郊外にあります陸軍総合整備廠、陸軍総合整備廠とはまたことしの６月に再度協約を締結いたしました。こんなところまでこの講座を拡大いたしました。これで、全部で８つの班に分かれて、今、運営がなされています。

このように、軍人を対象にした講座のみならず、また刑務所に服役中の人たちを対象にした講座も開設いたしました。ことしの５月、馬山の刑務所と収容者社会性強化のための人文学講座運営協約を締結しました。それで、馬山の刑務所とともに行なう人文学講座を開設いたしまして、今年14日、28時間の講座を進行させました。これが昨年の春秋、39師団とともに行なった講座のポスターです。左のほうが学生が軍人とともに足並みをそろえて進んでいっている、右側の絵は開かれた人文学講座を見せています。

このように開かれた人文学講座は、軍の将兵たちを対象にするということを考えまして、これは興味を引く話題を中心としながらも、人文学の価値と大衆的な関心とが調和するように、そのように講座を構成いたしました。そして、軍の服役期間中に、―日本では義務兵の制度がないでしょう。韓国ではまだ義務兵制でございます。よって、若い男性は必ず軍の公務をやらなければなりません。よって、みんなが経験する軍の服役期間中に、時間を無駄にせず、望ましい人生の価値について、この間に眼力を養い、また一方では人文学の素養を養うのに目標を置いています。

それで、開かれた人文学講座は、将兵対象の一般の講座―普通、120名程度が受講しています―また、領官級高級将校を対称にする上級講座―20名ないし30名が受講します―このように、一般の講座と上級の講座とに分けまして、文学、哲学、歴史、文化芸術―またここには公演も含まれます―また、文化遺産の探訪、このような範囲を分けまして、関連いたしまして講座を実施しています。その中で、芸術の公演と文化遺産の探訪が一番人気があります。なぜならば、軍人たちは軍の部隊から外に出ることは大変難しいからでございます。

参考までに―開かれた人文学講座についてのタイトルをちょっと御紹介したいと思ったんですけども。皆さんの後ろのほうに参考資料がありますので、これを皆さん参考になさってください。これは、開かれた人文学講座の様子を写した写真です。軍部隊の内部の行動におきまして、約20名から150名ぐらいの将校、将兵たちが集まりまして、この講座を聞いています。これは、外部の米紙を紹介いたしましてしました講座の姿です。これは、将兵たちを連れて博物館を訪問いたしまして、人文学科の講座を進めているところです。これは、修了式を兼ねた芸術の公演の姿です。これは、終わりまして、記念撮影です。私はここにいますよ。廉先生ですね、洪先生ですね。これは師団長でございますね、39師団の師団長ですね。

開かれた人文学講座の成果を整理してみま

すと、開かれた人文学講座は軍部隊の将兵を対象とするために、特殊な手段とも言える大学と部隊の有機的な協力体制の構築が必須でありました。ですけれども、師団長以下、部隊の幹部らの積極的な協力によりまして、多くの成果をおさめることができました。このような有機的な協力体制を構築するに当たりましては、単なる人文学の講座をやっただけではなく、軍の部隊で必要といたしますいろいろなものを支援することによって、可能になったものもあります。

大学と部隊との全般的な交流と協力によりまして、地域住民とともに行う大学と部隊というイメージを高めることによって、地域社会との連帯を強化できるという成果もありました。今回の講座について、言論界においても、大衆とともに行う人文学、現場に出かける人文学といたしまして、非常に高く評価されました。新聞の記事があって、皆さんにお見せしようと思っていたんですけど、うまくこれ作動しない可能性がありますので、もうやったことにいたします。（笑）

それで、市民人文講座の学術研究財団から指定された20講座ぐらいがありますけれども、その中の優秀事例と選定されまして、発表したことがあります。何よりも大きな成果と言えますのは、私が思いますには、人文大学が活気を取り戻したということ、これは最も大きな成果と言えると思います。私どもが出発する少し前、先週ですけれども、また学術振興財団の支援講座に選定されまして、来年はもっと大きな規模で、軍部隊とともにする開かれた人文学講座を進めることができるように確定いたしました。その予算は、学術振興財団が進めます7,000万ウオンと、大学が支援いたします2,000万ウオン、これを合わせて9,000万ウオンの予算で進められる予定です。

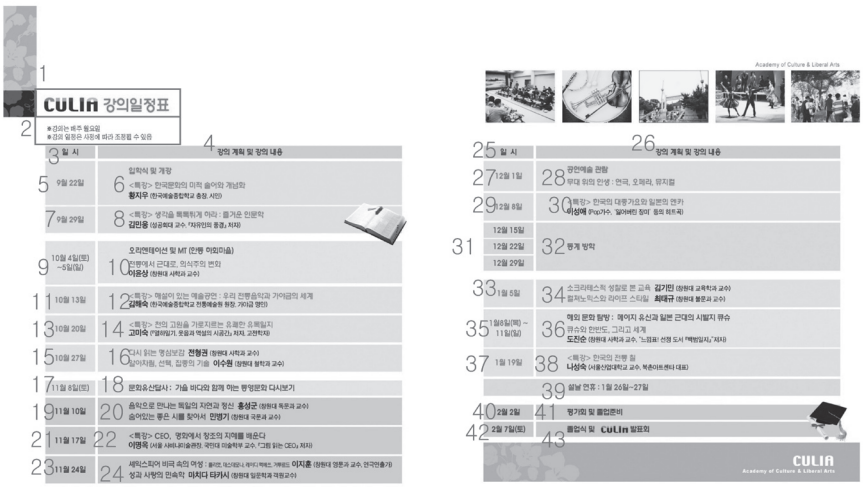
ですけれども、改善しなければならない点も少なくありません。まずは、将兵らの年齢、学歴、地位、社会的な経験などに大きな差があります。それで、一般の将兵を対象とした一般講座と領官級高級将校を対象とした上級講座に分けて実施しましたけれども、彼らの学年、学歴、また経験等に合った人文学の講座になるように、よりよい方案が模索されるべきだと思います。

また、軍の部隊と申しますのは、野外訓練や教育など、部内にさまざまな事情があります。このような事情によりまして、講座日程が変更されるとか、また時には指揮官の方針によりまして講座の内容が変更されるなど、軍部隊という特殊性を十分に考慮すべきであります。

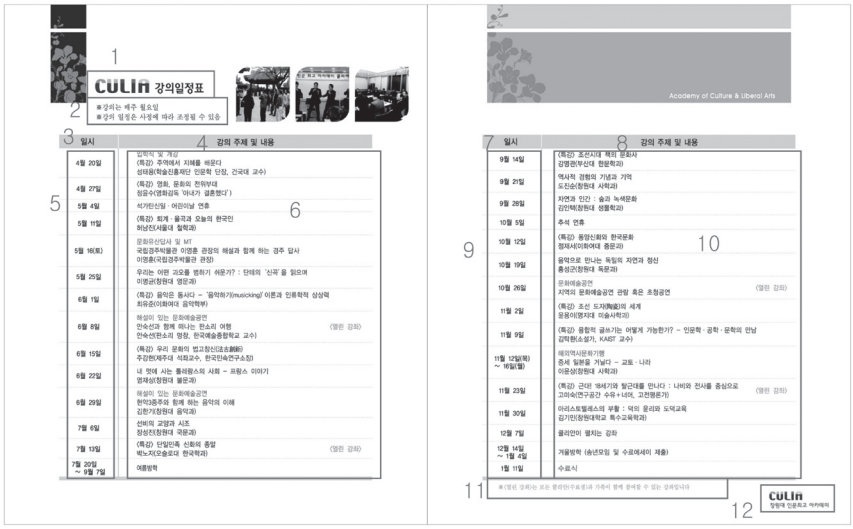
また、もう一つは、講座を開設する前の計画では、将兵を主要な受講の対象としつつも、軍人の家族や市民も参加できるようにする予定でありましたけれども、軍部隊の中で行う講座であるがために、軍人の家族を除いた民間人の参加は現実的にはそう簡単ではございませんでした。

最後に、市民人文講座の財源を学術振興財団の支援に依存しているという点、これが最も大きな問題だと言えます。このほかに、実務を担当する教授が多くないという点、また多様な講座を提供することが難しいという点です。こういうところも改善されなければならない問題です。

スライド1



スライド2



スライド3

講演録

李潤相先生講演スライドの一部についての補足資料

スライド１　１．2008年　春
２．熱い胸に冷徹な知性を、
若い覇気と人文精神のユニークな出会い！！
３．39師団と共に行うオープン人文学講座
（韓国革新アカデミー）
４．日時　　2008年3月13日～6月26日
（毎週木曜日18：30～20：30）
場所　　第39歩兵師団歴史館視聴覚室
対象　　将兵、軍人家族、昌原大学学生、昌原市民
お問合せ先　Tel.　055－213－2701, 2704
５．講義テーマ
６．伝統倫理と現代社会：明心宝鑑の話
‘不滅の李舜臣’と忠武公のリーダーシップ
文化遺産踏査：鎮海一帯の壬辰倭乱遺跡
言葉の魅力と慶尚道方言の魅力
文化と人：ジッドとサルトルの話
朝鮮時代の科学捜査と風俗の歴史
シェークスピアは生きている
解説と共に博物館探訪
南北関係の現状と課題
７．伝統から近代への衣食住の変化
トリ、チャンダン、シギム：韓国の音楽を理解するのに必要な数種類のコード
映画を読む楽しさ：苦難と戦う英雄の話未来社会の変化と職業
ダンテの地獄と煉獄旅行
歴史的経験の記念と記憶
音楽で出会うドイツの精神と自然
観念は去れ！肉体を楽しめ！：青年文化の移行
戦争映画の真実
８．｜主催｜　昌原大学校人文大学
第39歩兵師団
｜後援｜　韓国学術振興財団
９．2008年　秋
10．熱い胸に冷徹な知性を、
若い覇気と人文精神のユニークな出会い！！
11．39師団と共に行うオープン人文学講座
（韓国革新アカデミー）
12．日時　　2008年９月11日～12月23日
（毎週木曜日18：30～20：30）
場所　　第39歩兵師団歴史館視聴覚室
（各連隊講堂）
対象　　将兵、軍人家族、学生、市民
お問合せ先　　Tel.055－213－2701, 2704
講義テーマ
13．師団
14．21世紀文化と芸術の現状
サイバースペースと青少年らの文化
論理的なハングルの書き方
生活をのぞき見るおもしろさ：朝鮮後期風俗画
伝統から近代への衣食住の変化
英米文化と韓国文化の比較
解説と共に公演芸術鑑賞
体と感情の哲学コルセットからパンクまで：ファッションの神話的意味
森と文化
科学技術革命と現代資本主義
秋の街角で出会う一編の詩
15．師団
16．連隊
17．戦争映画の真実
‘失楽園’の世界
日本はある
美術の中の音楽
障害者と共に生きる社会
生活の中の哲学
文化遺産踏査：晋州、高城、昌寧
大衆文化とその意味
成功と幸福の哲学
韓流、その流れと下降
東アジア古代社会と‘東北工程’
統一ドイツの昨日と今日
18．｜主催｜　昌原大学校人文大学
第39歩兵師団
｜後援｜　韓国学術振興財団

スライド２
１．CULIA　講義日程表
２．講義は毎週月曜日講義日程は都合により変更される場合があります
３．日時
４．講義計画および講義内容
５．9月22日
６．入学式および開講
〈特講〉韓国文化の美的述語と観念化
ファン・ジウ（韓国芸術総合学校総長、詩人）
７．9月29日
８．〈特講〉さくさくっと考えよ：楽しい人文学
キム・ミンウン（聖公会大学教授、『自由人の風景』著者）
９．10月４日（土）～５日（日）
10．オリエンテーションおよびMT（安東河回村）
伝統から近代への衣食住の変化
イ・ユンサン（昌原大学史学科教授）
11．10月13日
12．〈特講〉解説のある芸術公演：
韓国伝統音楽と歌謡曲の世界
キム・ヘスク（韓国芸術総合学校伝統芸術院院長、伽椰琴の名手）
13．10月20日
14．〈特講〉空の高原を横切る愉快な遊牧日誌
コ・ミスク（『熱河日記、笑いと逆説の時空間』著者、古典学者）
15．10月27日
16．もう一度読む明心宝鑑　チョン・ヒョングォン

（昌原大学史学科教授）
識別、選択、集中の技術　イ・スウォン
（昌原大学哲学科教授）
17. 11月8日（土）
18. 文化遺産踏査：秋の海と共に統営文化の再見
19. 11月10日
20. 音楽で出会うドイツの精神と自然
フン・ソングン（昌原大学独文科教授）
埋もれた良い詩を探して　ミン・ビョンギ
（昌原大学国文科教授）
21. 11月17日
22. 〈特講〉CEO、名画から創造の知恵を学ぶ
イ・ミョンオク（ソウルサビナ美術館館長、国民大学美術学部教授、『絵を読むCEO』著者）
23. 11月24日
24. シェークスピア悲劇の中の女性：
ジュリエット、デスデモナ、レディマクベス、ガートルード　イ・ジフン
（昌原大学英文科教授、演劇演出家）
性と愛の民俗学　マチダ・タカシ
（昌原大学日文学科客員教授）
25. 日時
26. 講義計画及び講義内容
27. 12月1日
28. 公演芸術鑑賞舞台上の人生：演劇、オペラ、ミュージカル
29. 12月8日
30. 〈特講〉韓国の大衆歌謡と日本の演歌
イ・ソンエ（ポップ歌手、‘なくしたバラ’等のヒット曲）
31. 12月15日
12月22日
12月29日
32. 冬期休暇
33. 1月5日
34. ソクラテス的省察からみた教育
キム・ギミン（昌原大学教育学科教授）
カルチャーノミックスとライフスタイル
チェ・テキュ（昌原大学仏文科）
35. １月８日（木）～11日（日）
36. 海外文化探訪：
明治維新と日本近代の始発地－九州
九州と朝鮮半島そして世界
ト・ジンスン（昌原大学史学科教授、“感嘆符!選定図書『白凡逸志』”著者）
37. １月19日
38. 〈特講〉韓国の伝統寺
ナ・ソンスク（ソウル産業大学教授、北村アートセンター代表）
39. 旧正月連休：1月26日～27日
40. ２月２日
41. 評価会および卒業準備
42. ２月７日（土）
43. 卒業式およびCULIA発表会

スライド３　１．CULIA　講義日程表
２．講義は毎週月曜日
講義日程は都合により変更される場合があります
３．日時
４．講義テーマおよび内容
５．４月20日
４月27日
５月４日
５月11日
５月16日
５月25日
６月１日
６月８日
６月15日
６月22日
６月29日
７月６日
７月13日
７月20日～９月７日
６．入学式および開講
〈特講〉主役から知恵を学ぶ
ソン・テヨン（学術振興財団人文学団長、建国大学教授）
〈特講〉映画、文化の前衛部隊
チョン・ユンス（映画監督‘妻が結婚した’）
お釈迦様誕生日・子供の日連休
〈特講〉退渓・栗谷と今日の韓国人
ホ・ナムジン（ソウル大学哲学科）
文化遺産踏査およびMT
国立慶州博物館　イ・ヨンフン館長の解説と共に慶州踏査
イ・ヨンフン（国立慶州博物館館長）
我々は、どのような間違いを犯しやすいのか?：ダンテの‘神曲’を読んで
イ・ミョンギュン（昌原大学英文科）
〈特講〉音楽は動詞だ－‘音楽をする（musicking）’理論と人類学的想像力
チェ・ユジュン（梨花女子大学音楽学部）
解説のある文化芸術公演アン・スクソンと行くパンソリの旅
〈オープン講座〉
アン・スクソン
（パンソリ名唱、韓国芸術総合学校教授）
〈特講〉韓国文化の法古創新チュ・ガンヒョン
（済州大学碩座教授、韓国民俗研究所所長）
私のすてきさが生きるトレランスの社会
―フランスの話ヨム・ジェサン
（昌原大学仏文科）解説のある文化芸術公演
弦楽三重奏と共に音楽の理解
キム・ハンギ（昌原大学音楽科）
ソンビの教養と時調
チャン・ソンジン（昌原大学国文科）
〈特講〉単一民族社会の終末
パク・ノジャ（オスロ大学韓国学科）

〈オープン講座〉
夏季休暇
7．日時
8．講義テーマおよび内容
9．9月14日
9月21日
9月28日
10月5日
10月12日
10月19日
10月26日
11月2日
11月9日
11月12日（木）～16日（月）
11月23日
11月30日
12月7日
12月14日～1月4日
1月11日
10. 〈特講〉朝鮮時代の本の文化史
カン・ミョングァン（釜山大学漢文学科）
歴史的経験の記念と記憶
ト・ジンス（昌原大学史学科）
自然と人間：森とグリーン文化
キム・インテク（昌原大学生物学科）
お盆連休
〈特講〉東洋神話と韓国文化
チョン・ジェソン（梨花女子大学中文科）
音楽で出会うドイツの精神と自然
フン・ソングン（昌原大学独文科）文化芸術公演地域の文化芸術公演鑑賞または招請公演
〈オープン講座〉
〈特講〉朝鮮陶磁の世界
ユン・ヨンイ（明知大学美術史学科）
〈特講〉融合的な書道はいかにすれば可能か？－人文学・工学・文学の出会いキム・タクハン（小説家、KAIST教授）
海外歴史文化紀行
中世日本を散策する―京都・奈良
イ・ユンサン（昌原大学史学科）
〈特講〉近代！18世紀と脱近代との出会い：蝶と戦士を中心に
コ・ミンスク（研究空間スユ+ノモ）、古典評論家
〈オープン講座〉
アリストテレスの復活：徳の倫理と道徳教育
キム・ギミン（昌原大学特殊教育学科）
キュリアンが繰り広げる講座
冬期休暇（年越しの集いおよび終了エッセイ提出）
修了式
11. 〈オープン講座〉は、全キュリアン（修了生）と家族が一緒に参加することができる講座です。
12. CULIA昌原大学人文最高アカデミー

人文最高アカデミー（CULIA）

これが開かれた人文学講座のスローガンです。それでは続きまして人文最高アカデミーについて申し上げます。

趣旨及び目的は、人文学と文化芸術講座を結合して、人生の真の価値と美しさを探求するということ、専門家や教養人たちに人文学的な知識、グローバルマインド、創造精神、人生の洞察力をはぐくむことができるようにすることでした。それによって、韓国社会と歴史に対する理解、変化する地球村と多文化に対する理解、―きのういただきました本によりますと、日本では「異文化」という単語をたくさん使用するようですけれども、韓国ではこれは「多文化」というふうによく表現いたします―人間に対する理解等を目標にしまして、水準の高い講座を提供することです。

また、競争と実用性のみを前面に押し出す社会現象と、日常に疲れた現代人に対して、自分自身と世の中を注意深く、またゆったりした気持ちで考察しながら自分を振り返させるというところに目的があります。

特に、人文学最高アカデミーは、一般的な人文学の講座とは違って、人文学を教えるのではなく、講座を通じて人間と社会についてともに考え、討論する契機をつくるということを目的にしました。それで、数回にわたります芸術公演や講座が終わりましたら、ともに集まって討論をするワインの集いなども開催されました。私は以前はワインはほとんど飲みませんでしたけれども、昨年、ＣＵＬＩ

Ａが始まった後に、１週間に平均ワイン２本から３本をあけるようになりました。

ＣＵＬＩＡという用語は、人文最高アカデミーをあらわす言葉ですけれども、カルチャーとリベラルアートの頭文字からなる言葉で、人文学を通して人間と社会に対する理解を高め、心を開いて耕して、我々の品性を芸術作品のごとく発掘し育てようという、そういう意味を含んでいます。ＣＵＬＩＡのアルファベットの中のＣは、カルチャーにもコミュニケーション、クリエーション、コントリビューション、また私どものチャンウオン・ナショナル・ユニバーシティ、これを意味しますし、Ａはアートともにアチーブメント、アカデミーをあらわしています。

経過を申し上げますと、2008年５月、昨年の５月ですが、昌原大学の人文最高アカデミー（ＣＵＬＩＡ）運営委員会をつくりまして、開設を準備いたしました。去年９月からことしの５月にかけまして、2008年９月から2009年の１月まで19回の講義、ここは海外文化探訪がありましたけれども、九州、鹿児島、宮崎、国内探訪が２回、芸術公演２回を含めて振興されましたけれども、25名が受講いたしました。受講生は主に企業体のＣＥＯ、弁護士、医者、教養に関心のある主婦、こういう方たちが中心でありました。ことしの４月から12月まで24回の講義が進められましたけれども、海外歴史文化紀行、京都に１回行ってまいりました。国内探訪が１回ありましたし、芸術公演が３回ありました。ことしは27人の方が受講されました。

これは去年のＣＵＬＩＡの講義日程表です。これは今年のＣＵＬＩＡの講義日程です。去年と今年のＣＵＬＩＡのパンフレットを持ってきております。韓国語になっていますけれども、関心がおありの方はどうぞごらんになっていただきたいと思います。

これは、ＣＵＬＩＡの様子を写した写真です。これは、最初の入学式のときの姿ですけれども、当時の学長があいさつを申し上げております。それから、ファン・ジウ詩人がおります。韓国芸術大学の方がおられますけれども、これはあるお寺を探訪したときの写真です。これはカヤグムの名人を招聘いたしまして、行ないました講座の写真でございます。これは、慶長の役のときの日本の大軍を防ぎました李舜臣という将軍の、これはトンニョンという地域ですけれども、そこにある島のところを探訪したときのことです。

これは、ＣＵＬＩＡの講義室で、小さな音楽会をしたときの写真です。これは、昨年、日本の宮崎を探訪したときの姿です。これは、ＣＵＬＩＡの専用講義室です。これは、パンソリの有名なアン・スクソン先生を招聘いたしまして、講演と解説を兼ねた、そういう講座の写真です。これは、昨年、ＣＵＬＩＡの課程の修了式のときに、受講生たちが自分の特技を見せてくれている写真です。この方は弁護士ですけれども、韓国の語りをやっております。これは、シェークスピアのロミオとジュリエットの場面です。これは、ことし11月に、日本の京都の南禅寺を探訪したときのものです。紅葉がとてもきれいでございました。

ＣＵＬＩＡの人文最高講演をやりまして得ました成果はたくさんありますけれども、私がそれを申し上げるよりも、昨年、ＣＵＬＩＡの講座を受講した方たちの感想を申し上げたほうがもっと適当かと思いまして、ここに３人の方の感想を御紹介しておきました。

最初の方は、忙しい日常から離れて、人文学、また芸術と触れ合うことについて、まるでのどが渇いたときに冷たい水に出会う、そういった気分だというふうにおっしゃいまし

たし、２人目の方は、この課程を受けながら、人文学の薫りをかぎながら、長い間忘れていた自分の人生について、また考え直すことができたという、そういうふうな言葉を残しております。３番目の方は、先ほどの写真で見ましたロミオとジュリエットにジュリエットとして出演しました人ですけれども、この齢では体験しがたい、そういうふうな演劇をしながら、まだ多くの可能性が残っているということを再確認した、そういうふうな感想を漏らしております。

私が思いますに、ＣＵＬＩＡの成果は、まず受講生たちが大変高い満足度を得たということです。それから、交流、親交と再充電の時間、多くの時間を得ることができたということです。それで、この記事に載った記事を見ますと、地域の新聞が記事ではなく社説でＣＵＬＩＡについて本当に賞賛をしております。私どもがこれはちょっとすぎた評価だというふうに言えるほどに、こういうふうに褒めていただきました。

けれども、人文最高アカデミーの中にも、改善すべき点も多々あります。まだ、大衆的な興味と学問の深さの間にはまだ相当深い隔たりがあるので、これを適切に配分する方案を模索する必要があります。また、ＣＵＬＩＡの課程を主に聞いておりますのは、ＣＥＯ、医者、弁護士など、そのような専門職についておられる方たちが多いために、講義時間や講義の期間などの設定において、また現地探訪や海外旅行など多くの時間が必要な講義の設定が大変難しいという点が上げられます。

また、これには少ないとは言えない額の受講料を受け取っていますけれども、社会的に著名な先生たちを招聘するとか、また講演を含めたさまざまな講座を開設するのには予算が大分不足しています。それで、受講料とどれだけ質の高い講義を設定するかの間で、この均衡をとることが大変難しい問題だと言えます。

もう一つは、既存の大学講義とは異なる、幅広く、また深みのある、人文学全体を包括できる、そういった講義の開発が必要であります。

これからの展望

今まで申し上げました開かれた人文学講座、また最高アカデミーをもとにしまして、これからのことを展望してみますと、開かれた人文学講座は、軍部隊の以外にも産業体の役員、職員、医師と教師、市民らを対象に、また引き続き拡大していく予定であります。そのためには、大学と地方自治団体、企業体の方たちに支援を要請するつもりでいます。百貨店、デパート式の講座ではなく、専門店式の講座の開設によって、人文学の深さを追求する教養人の要求を充足させたいと考えています。そのためには、昌原大学に「開かれた人文学センター」を開設準備中であります。

結論的に申し上げますと、社会が多様化して、所得水準が高まり、人文学に対する需要は増え続けると思います。よって、何よりも私たち人文学者たちの努力が大変重要だと思います。分科学問間の障壁を崩し、時代と大衆の変化に対応して、自らを変えていこうとするさまざまな試みが必要です。これまで申し上げました開かれた人文講座と最高講座のＣＵＬＩＡがその１つの試みと思いますし、このような開かれた講座が人文学の学問的な発展、本当は性格が違うと言えるけれども、人文学の全般的な発展のためには必要なものだと思います。

（以上は、2009年12月19日（土）に人文学部大会議室にて開催された講演会の記録である。）